

横山ゆずり作 「管理社会の子供たち」

<前編 「指示待男君の変身」>

(効果音) (教室のガヤ。ホームルームの時間)

大川真知子 どうですか？ だれか出たい人、いないんですか？ 意見を言ってください。(一同沈黙) 立候補がないのなら、推薦してください。参加種目は、バレーボールが男子と女子合わせて 2 チーム、そのほか、バスケットとサッカーのどちらかでチームですけど。(なおも沈黙) 決まらないと、うちのクラスだけ球技大会に出られなくなりますよ。いいんですか？ それじゃ 1 人ずつ順番に当てますからね。意見言ってください。朝倉君。

朝倉 えー、別に。決まるとおりでいいと思います。

真知子 決まらないから意見聞いているでしょ。無責任なこと言わないでよ。次、飯田さん。

飯田 あの、別にありません。

真知子 じゃあ、上原君。

上原 分かりません。

真知子 江原さん、どうですか？

(効果音) (かぶさるようにチャイムの音)

生徒 (口々に)「終わり終わり」「早く終わろう」「あとは適当に決めといてよ」

真知子 ちょっと静かにしてください。クラスのことなんだから、みんなまじめに考えて。

田沢先生 そうだ。大川の言うとおりでだぞ。クラス全体のことなんだから、みな、もう少し積極的に取り組みよ。チーム分けからこの調子じゃ、とても球技大会本番での優勝は程遠いぞ。

生徒 (口々に)「別にいいよね」「だってねえ」

田沢先生 いいか、それじゃまず、どうやってチームの選手を選んだらいいか、そこから決めていこう。高橋、どうだ？

高橋 分かりません。

田沢先生 分からないことはないだろう。例えば、くじ引きとか、アイウエオ順とか、推薦とか、あみだとか、いろいろあるだろうが。

高橋 じゃ、くじ引き。

原田 えー、くじ？ やだ。

田沢先生 じゃ、原田、お前は何がいいと思うんだ？

原田 やっぱし、自分の出たいのに出たほうがいいと思います。

高橋 希望が偏っちゃったら、どうするの？

上原 ジャンケンじゃないの？

生徒 (口々に)「そうだよね」「それよりさぁ」「くじよりは自分の...」「出たくない人もいるかも」

田沢先生 よーし、じゃ決まった。各種目自分で出たい者。人数オーバーしたら、じゃんけんだな。

真知子ナレーション ここは青春中学2年C組。わたしはこの優柔不断なクラスの学級委員で苦労している、大川真知子。何をやるにも人任せで、みんな、自分の意見なんて言おうとしない。ううん、考えようもしないんだと思う。だから、いつも何か決めるときには、すごく時間がかかっちゃう。見るに見かねて担任の田沢先生がアドバイスしてくれなきゃ、どうなることやら。田沢先生というのは、今年うちの担任の数学教師なんだけど、この人がまたちょっと変わってる。なんて言うか、中学の先生らしくない。この間だって...

(音楽) (ブリッジ。過去の回想。)

田沢先生 ...ということで、この三角形の角Aと角Bと角Cを足すと、全部で180度だ。どんな三角形でも必ずそうなるぞ、いいか。“三角形の内角の和は2直角”。それが教科書の32頁に書いてある。大事だから、線引いとけよ。

朝倉 先生、何色で引いたらいいんですか？

田沢先生 何色だぁ？ なんでもいいよ。赤でも青でも、好きなので引いとけ。

飯田 ノートにも書くんですか？

田沢先生 当たり前だ。小学生じゃないんだからな。大事だと思ったら、言われなくても書くんだよ。お前ら、少しは自分で考えろ！ いいか、「こうしろ、ああしろ」って指示されるのを待ってるだけじゃ、まるで“支持待ち族”だぞ。みんな“支持待ち男君”と“待ち子さん”になっちゃうなよ。大人だってな、親だって教師だって間違ってる場合もあるんだから、うのみにしないで、少しは疑ってかかってもいいんだぞ。

(音楽) (ブリッジ。回想終わり)

ナレーション あれ聞いてなんとなくハッとしちゃった。それにしても、自分だって教師のくせして、教師を当てにするな、なんて堂々と言う先生も珍しい。でも確かに、田沢先生の影響でうちのクラスも変わってきたみたいだ。あっちこっちにぶつかりながらではあるけれども、我が2年C組は、球技大会という目標に向けて、なんとかエンジンがかかり始めていた。

(効果音) (放課後の教室のガヤ)

上原 おーい、じゃ、男子バレーの練習行くぞ。うちのクラスがコート使えるのは、4時半からだから急げよ。

真知子 応援団のほう、衣装大丈夫？ 鉢巻き足りてる？

高橋 足りてる足りてる。団長の手袋は？

上原 あ、借りてこないとダメだ。

真知子 じゃ、手が空いている人は花飾り作って。あ、ちょっと朝倉君。何よ、帰っちゃうの？

朝倉 運、悪いけど、今日、用があるから。

真知子 そんなのあり？ みんな忙しいのに部活休んだり、塾に遅れそうになったりしても、クラスのためって頑張ってるんだよ。朝倉君、昨日だって、おとといだって、一人でさっさと帰っちゃったじゃない。ちょっとヒンシュクだよ。

朝倉 悪いけど、都合が…。

真知子 都合って何よ。そんなに大事な用なわけ？ なら、言ったんさいよ。

上原 やめとけよ。どうせ朝倉は無理だよ。お前、お母さんに言われてんだろ。「早く帰ってきて、家庭教師が来る前に勉強しておけ」って。

朝倉 別にそういうわけじゃ…。

上原 こいつのお母さん、すげえるさいんだよ。だから引き止めても無駄だぜ。

真知子 何、それじゃ朝倉君、ママに逆らえないっての？ 信じらんない。へーえ、やだ、男の子のくせに。

朝倉 違うよ。そうじゃないって言ってるだろ。だけど…。

真知子 だけど、何よ。

(効果音) (教室の戸がガラッと開く音)

田沢先生 おう、調子はどうだ？ お、これが応援団の衣装か。かなり派手だな。うん、これなら試合で負けても、ベストドレッサー賞は堅いな。お前たち、どうしたんだ？ 朝倉、どうした？

真知子 朝倉君、「帰る」って言うんです。ほかのみんなが一生懸命やってるのに。すごい非協力的。

田沢先生 まあ周りの者がそうカッカするな。球技大会はあくまでも自主的な行事なんだから。朝倉が自分で決めることだ。人それぞれ事情もあるだろう。だがな、朝倉、これだけは言っとくぞ。今、この2年C組というクラスが団結して、一つの目標に向かっていこうとしている。これは、今、ここでしか体験できない貴重な経験だぞ。二度と味わうことのできない時間だ。親に言われたからでもない。みんなやおれに言われたからでもない。お前が自分で考えて決めるんだ。

(音楽) (ブリッジ。明るく楽しい感じ)

ナレーション そんなことがあって、いよいよ球技大会の日がやってきた。田沢先生のリードで、今までにない頑張りを見せて備えてきた我がクラスは、優勝は惜しくも逃したものの、先生の予言どおり、特別応援団賞を勝ち取った。

生徒 (口々に)「やったね！」「やったやった」など。

田沢先生 お前たち、やればできるじゃないか。見ろ、この輝く賞状を！

生徒 (ワーワー言いながら拍手)

田沢先生 まあ、派手な衣装と、力強い、というか型破りな応援で勝ち取った名誉ある賞だ

な。もっともおれは校長にチクリと嫌味を言われたけどな。「田沢先生のクラスは、実にユニークというか、過激ですな。」とかなんとか。(笑い)

飯田 先生、大丈夫？校長ににらまれてクビにならない？

田沢先生 バカお前、クビが怖くて教師ができるか。

高橋 カッコいい！(笑い)

(効果音) (放課後のガヤ)

ナレーション いつの間にか、クラスはすっかり田沢先生のペースに乗せられて、活気が出てきた。中でも、例の朝倉君にとって、今回のことはずいぶん大きかったようだ。

上原 朝倉のやつ、あの時おれたちがつついて、それから田沢先生にも言われたじゃん。

真知子 ああ、「お前自身の問題だから、自分で判断して決めろ」って言われたよね。

飯田 あれから毎日一緒に残るようになったじゃん？

真知子 うん、それもイヤイヤじゃないみたいだったよね？

上原 そうだろ？あいつ、お母さんとかかなり派手にやりあったらしいぜ。

真知子 やりあったって、ケンカ？

高橋 いや、ケンカだったって、殴ったりはまさかしないだろうけどさ。今まで一度も母親に口答えしたことのない人が、急に自分の言いたいことを思い切りぶつけたんだから、お母さん、すごいびっくりしたらしいよ。うちの母と親同士仲いいから分かるんだけどさ、朝倉君のお母さん、ショック受けちゃって、「うちの子が、こんな反抗的な態度をとるようになったのは、おかしい教師が陰でけしかけているからだ」って、田沢先生のこと恨んでいるっていうわさよ。

真知子 そんなのひどいよねえ。逆恨みってやつじゃない？今ごろ反抗期なんて遅すぎるくらいだよねえ。

上原 そうそう。だからおれも母ちゃんに言ったけどさ、田沢先生って、最初はなんか熱血教師ぶって、うざってえなとか思ったけど、おれたちの考えとか、ちゃんと認めてくれるもんな。

真知子 うん。今までの先生ってさ、なんかいつも上から命令するっていうか、「あしなさい、こうしなさい」って、いちいち細かいところまで言ってきたもんね。こっちも言うこと聞いてりゃ楽だから、そのうち自分で考えるのやめちゃってさ。

飯田 田沢先生に「指示待ち族」って言われた時は、分かんなかったけど、今思うと、なんとなく分かるね。朝倉君も、これで“ママの支持待ち坊や”から抜け出せたんだから、ね？

真知子、飯田 (笑い)

ナレーション わたしたちにとって、朝倉君の武勇伝は、ちょっとした笑い話のネタでもあり、時々話題に上った。けれども、これが後になって起こる事件の小さな引き金になっていたとは、その時にはだれも気づかなかった。

<後編「弱いときこそ」>

ナレーション　我が青春中学2年C組は、春の球技大会をきっかけにして、少しずつ団結していった。それというのも、担任の田沢先生の考え方に影響されたからかもしれない。わたしたちは、今まで押さえつけられ、おとなしく親や先生の言うことを聞くだけだったのが、次第に自分で考え、みんなで話し合うということを身に付けていった。そして、球技大会での成功の自信も手伝ってか、だんだん大胆な企画を考え出すようになった。

(効果音)　(放課後のガヤ)

上原　だからさ、ここは一発、みんなでワーッといこうぜ。

飯田　ふざけないでよ。遊びじゃないんだからね。

上原　分かってるって。クラスの親ぼくを深め、進路について一緒に考えようってことだろ？

飯田　そうよ。ただの旅行じゃないんだから。

高橋　でも本当に大丈夫かなあ。中学生だけで行くなんて、田沢先生に一言相談したほうがいいんじゃない？

上原　バカだな。いつも「自主的に考えて行動しろ」って言ってんのは、あいつだけ。

高橋　そりゃそうだけど...。何かあったら大変だよ。

朝倉　「失敗を恐れてたら何もできない」って、田沢先生いつも言ってるじゃないか。

上原　そう！朝倉、いいこと言うじゃねえか。これで決まりだな。

飯田　朝倉君、ほんと変わったよねえ。

ナレーション　こんな調子で、わたしたちは、中学生だけの1泊旅行を計画したのだ。計画は、ほかのクラスにはもちろん、田沢先生にも知らせず、秘密に立てられた。準備は着々と進められ、わたしたちは、自分たちの企画力、行動力に、我ながら感心すらしていた。そして計画はいよいよ決行の日を迎えた。ところが...

(効果音)　(電話のベル、けたたましく)

田沢先生　はい、田沢です。...はい、青春中の田沢ですが。はい、え？...警察？はい、確かにうちの生徒ですが。生徒が何かしたんでしょうか。...はい、...はい、...そうですか。分かりました。とにかく、すぐにそちらに伺いますので。

(音楽)　(ブリッジ。不安な感じ)

校長先生　田沢先生。今後のことは、わたしとしても校長としての立場を問われるような事態ですからな。見逃すわけにはいかんのですよ。

田沢先生　はい。まことに私の担任としての監督不行き届きで、学校や校長先生にもご迷惑をおかけして、申し訳ありません。

校長　自分のクラスの生徒が、しかも何十人もそろってですよ、何か計画してるのに気づかなかったとは。田沢先生ほどの人がねえ。

ナレーション わたしたちの一行は、東京から急行で1時間ほどの郊外の河原にたどり着くはずだった。ところが夕方、薄暗い中をぞろぞろと歩く中学生の集団はかなり人目を引き、とうとう地元の警察に保護されてしまったのだった。もちろん担任の田沢先生は責任を追及され、緊急の職員会議も開かれていた。

校長 田沢先生、わたしは常々、先生の熱心な教育者としての在り方に、深く敬意を払っている者であります。しかし、なんと言っても、彼らはまだ子供です。ですから、彼らの自由にさせるといのは、非常に危険なことなんです。田沢先生は、日ごろ生徒に、自主性を持って教えておられるようですが、

田沢先生 はい、自ら考え、自ら判断するようにと教えておりますが、

校長 そこですよ。生徒を信頼し、尊重すると言えば聞こえはいいが、その結果がこのたびの不祥事ですからね。この折、実は父兄からの先生の方針に対するいろいろな評価もわたしの耳に入ってきましたね。

田沢先生 どういうことでしょうか？

校長 実はですね。先生のクラスの朝倉という生徒がおりますね。その母親が、他の生徒の父兄をも巻き込んで、先生に抗議するといきまいとるんですよ。なんでも、「うちの子は先生にたきつけられて、手のつけられない反抗をするようになった」とかなんだとか言ってですな、「担任を変えてほしい」とまで言っているらしい。まあわたしも、父兄の言い分を頭から認めたりはせず、抑えてきたんですが、そこへ折あしく今回の事件が起こってしまったものだからね。どうにも言い訳のしようがなく困るとるんだ。

田沢先生 しかし校長、朝倉の件は、本人の自発性を促す意味での…。

校長 そこだよ、そこ。いいですか。中学生に自発性なんてものを発揮された日には、教師が何人いても管理しきれものじゃない。やつらには、ピシッと規律を与えて、厳しくそれを守らせる。そして自分の判断などというものは、まだまだ甘ちゃよくて通用しないんだと思わせとくに限るんですよ。まあ、田沢先生は、まだお若い。教育に対する高い理想をお持ちでしょうが、現場はなかなか理想どおりにはいきませんからな。

ナレーション 田沢先生が悪い立場になりそうだというわさは、わたしたちにとって、自分たちが処分を受けるよりもつらいものだった。直接先生に確かめることもできず、わたしたちはただ不安な気持ちを持って余っていた。ついに思い余ったわたしは、夕方、学校に行ってみた。驚いたことに、教室にだれかいた。がらんとした中に、一人うずくまるように座っている人影、それは田沢先生だった。わたしが近づいても、顔を上げる様子もなく、先生は一心に何かつぶやいていた。

田沢先生 (FI)...どうか助けてください。生徒たちは、ようやく自発的に何かに取り組もうという気持ちを持ち始めたところです。今、その芽を摘んでしまうことは、わたしにはできません。生徒を管理しやすくするために、言われたことしかできないよう

な枠にはめ込むことは、したくないのです。しかし、わたしには力が足りません。神様、わたし自身弱いので、とても自分の力で彼らを導くことはできません。どうか、あなたが知恵と力を与えてください。生徒たちにとって、この若い日に、彼らの人格の中心となるものをしっかりと持たせてやりたいのです。どうぞ、朝倉が意識し始めた、“自分自身の意思で行動する”ということ、正しい方向に伸ばしていくことができますように。また、上原が...。(FO)

ナレーション 先生は... 先生は祈っていたのだ。その小さなつぶやきに聞こえたのは、田沢先生の祈りの言葉だったのだ。ショックだった。いろんなことがショックだった。わたしたちクラスの生徒の名前を一人ずつ挙げて祈っている先生の姿に、わたしは何か不思議なものを感じていた。そしてまた、意外でもあったのだ。いつもわたしたちに、「自分の頭で考え、自分の手足で動け」と言っていた先生が、今、何者かに頼ろうとしている。そして、わたしたちから見れば何も怖いものなんかないように見える先生が、「弱い自分に力をください」と祈っているのだ。いつの間にか、わたしは先生の祈りに聞き入っていた。

田沢先生 ああ大川、どうした？ ずっとそこにいたのか？

真知子 先生...。すみませんでした。みんなして先生に迷惑をかけてしまって、こんなに大変なことになるなんて思わなかったんです。

田沢先生 今日のことは、ずいぶん大きな勉強をしたな。それぞれ教えられることがたくさんあったはずだ。

真知子 先生、わたしたちのせいで、辞めさせられちゃうなんてことないですよね？

田沢先生 (笑って) そんなことはお前たちが心配しなくてもいいさ。それより、これを肥やしにしていかなくちな。

真知子 そうすれば先生みたいに、前向きで強い人になれますか？ あの、わたし、聞こえちゃったんですが、先生、お祈りしていたでしょ？ クリスマスなんですか？

田沢先生 ああ、そうだよ。

真知子 わたし、ちょっとびっくりしました。先生みたいな人が、クリスマスだなんて。神様信じてるなんて。

田沢先生 おいおい、そりゃどういう意味だい？

真知子 だって、クリスマスって、なんか言っちゃ悪いけど、ひ弱っていうイメージあったんですよね。なんて言うか、神様に頼るっていうことが、消極的な感じがしてたんです。だから、先生みたいに“自分の人生、自分で切り開け”みたいな人が、神頼みしてるって、意外だった。

田沢先生 おいおい、“神頼み”はないだろ。ひどいな。しかし今、お前は「先生みたいに強い人が」と言ったが、それは違うぞ。僕は思うんだが、本当の強さってというのは、自分がいかに弱くて、愚かで、力のないものかを知ることじゃないの

かな。聖書の中にあるんだ。「人は弱いときにこそ強い」って。

真知子

弱いときにこそ、強い…。

田沢先生

ああ。君たちは今、大きな管理社会の中で生きてる。その中で僕は、君たちができるだけ伸び伸びと生きていけるように、と祈りながら教えてきた。君たちは、次第に自分の中の隠れた力に気づき、それを思いっきり発揮させようとした。大人になろうとした。でも、本当の大人とはな、指示されなくても自分で行動できるだけじゃなくて、自分の生き方に責任を持つということなんだ。人は、本当の自分を知るときに、初めてそんな生き方ができる。イエス様が、内側からそうさせてくださるんだよ。

ナレーション

わたしは、静かに話す先生の言葉に、厳しさの中にも、何か目に見えない暖かいものが込められているのを感じた。そのときふっと、神様の愛という言葉が心に浮かんだ。“これが、多分、これまでどうしても分からなかった、先生の生き方の秘密なのかな”。わたしは心の中でそう思っていた。

< 完 >